

2014年度テイヤール・ド・シャルダン奨学金懸賞論文
グローバル化時代が抱える諸問題と私の研究
～テイヤール・ド・シャルダンの思想に照らして～

言語の多様性の減少と失語症研究の問題：

オメガ点の考察を通して解決の道を探る

外国語学研究科言語学専攻言語聴覚研究コース
博士前期課程二年 竹本 直也（たけもと なおや）

[要約]

本稿では、テイヤール・ド・シャルダンのオメガ点へ向かう進化の思想をもとに、グローバル化時代の問題点である言語の多様性の減少と、筆者の研究領域である失語症研究の問題点を考察した。シャルダンの思想を枠組みとして用いることで、言語の多様性の問題と失語症研究の抱える問題を統一的視点で捉えることができた。さらにシャルダンのオメガ点に関する考察から、両者の問題を解決するための方向性を見出すことができた。

シャルダンは進化には方向性があり、進化はオメガ点という到達点へ向かうと考えた。シャルダンによれば、オメガ点とは、最も優れた存在のみが到達できるという点ではなく、むしろ多様性を保ったまま全体が成熟することによって到達できる点である。この思想はまさに、言語と文化の多様性を減少させ、世界を均質化の方向へと向かわせている今日のグローバル化に対する批判であり、同時に進むべき道を示す希望でもある。同様に、言語の普遍的構造を過度に重視し、言語間の違いを考慮しない失語症研究への批判でもあり、やはり進むべき道を示してくれている。グローバル化と学問の発展という一見異なる二つの領域も、ともに人間の行う活動であり、シャルダンの思想を導入することによってはじめて、統一的に考察することが可能になった。

また、シャルダンの進化の思想では、自己中心的に生きるものは成長しない。他との関係の中で生きることではじめて、オメガ点へ向かい前進することができる。こうしたシャルダンの思想をうけ、本稿では最後に、筆者の研究領域からグローバル化の問題の解決へ貢献できる可能性を示した。

1. はじめに

本稿では、グローバル化時代の抱える問題と筆者の研究領域の現在抱える問題とを、統一的視点から議論し、その後両者の解決への道を議論する。最後に両者の接点として、筆者の研究がグローバル化の問題の解決に貢献する可能性について事例を交えて考察する。グローバル化時代の抱える問題としては、言語の多様性の減少を取り上げる。また、筆者の研究領域は、言語学と失語症研究である。筆者は現在言語聴覚士というリハビリ職の資格を取得するコースに所属しており、失語症の研究をしている。将来的に日本手話の失語症を研究したいと考えており、現在手話言語学も学んでいる。

両者を統一的に捉えるフレームワークとなるのは、イエズス会士であり科学者としても活躍したテイヤール・ド・シャルダン (1881-1955) の思想である。本稿で重要となるシャルダンの思想は、生命の進化には一つの方向性があるというものである。シャルダンによれば、この方向性はさまざまなスケールで見られる。例えば、地質上の歴史においても見いだせるし、生命全体の進化の歴史の中においても、さらに人間の社会形成の歴史の中にも見いだすことができる。このようにシャルダンの思想の射程は広く、あらゆるものがその内に同一の方向性を持つとされる。この点において、グローバル化の問題と学問的研究の進展を同一の視座で語る事が可能になる。

またシャルダンによれば、進化は、「オメガ点」と呼ばれる一点に向かう。この「オメガ点」について考えることは、グローバル化と科学研究の行き着く先を考えることである。本稿では、シャルダンによるこの「オメガ点」についての考察をもとに、グローバル化と言語障害学の抱える問題の解決と、今後の方向性を議論する。

本稿の構成は以下の通りである。まずグローバル化時代と科学研究における同様の傾向がもつ利点について議論し (第2章)、次にそれらの問題点について議論する (第3章)。そして、シャルダンの思想をもとにそうした問題点の解消や今後進むべき方向性について議論する (第4章)。最後にグローバル化の問題と筆者の研究領域との接点について、ろう者の言語権獲得に言語学が貢献した例をあげて考察する (第5章)。第6章で総括をし、本稿を終える。

2. グローバル化の利点

2.1. グローバル化時代の利点

グローバル化のもつ利点として、さまざまな情報が広く世界に開示され共有されてきたことが挙げられる。インターネットの普及も相まって、国による大規模な情報の規制は難しくなっている。情報が世界で共有されることにより、国際世論が力を持つようになった。非人道的な政策をとる国は国際社会から非難を浴びるようになり、どの国も国際世論を無視することはできなくなっている。世界的な奴隷制の廃止や女性の権利の見直しなどはグローバル化が貢献した例と考えることができる。こうした動きが一斉に世界に広がるのもグローバル化時代ならではの現象である。このように現在世界中にみられるグローバ

ル化の動きは均質化の過程と考えることができる。この均質化については第 3 章で再び取り上げる。いずれにせよ、このようにグローバル化は人道的な社会を形成することに貢献している面があることを認識することは重要である。

2.2. 言語学・失語症研究における、言語間に普遍的な理論の利点

グローバル化時代に対応する傾向として、言語学と失語症学において言語間の普遍性を重視するパラダイムについて考える。まず言語学についてだが、20 世紀の前半まで、言語学は英語やフランス語などの個別の言語を別々に記述していた。これはグローバル化以前の世界とのアナロジーで考えられる。しかし 20 世紀中盤、ノーム・チョムスキーの登場によって言語学のパラダイムシフトが起きる。チョムスキーは、個別言語の背後にある普遍的な文法規則の存在を示し、この言語間で普遍的な文法規則である「普遍文法」を明らかにすることこそ言語学の目的であると主張した (Chomsky, 1957)。これ以降、個別言語の間には表面的な違いがあるが、背後ではどの言語でも普遍的な文法規則をもつという仮説が広く共有されるようになった。そして多くの個別言語の研究が、この「普遍文法」を明らかにするという共通のフレームワークのもとで行われるようになった。すなわち、すべての言語を「普遍文法」という単一の原理によって捉えようとしたということである。これは言語学におけるグローバル化の時代とすることができるだろう。言語間の普遍性を重視するこの姿勢は現在でも続いており、言語間の普遍的な構造が次第に明らかになってきた。こうした成果の一つに、手話言語学の発展がある。詳しくは第 5 章で取り上げるが、言語間の普遍性を明らかにしようとする言語学によって、それまで軽視されていた手話言語が、他の音声言語と同じ「言語」であるということが明らかにされた。これはろう者の言語権獲得に対する大きな貢献であった。

失語症の研究においては、以前から「言語」の障害であり個別言語に関わらず生じるといことが言われていたが、チョムスキーの言語学以降、理論的道具立てが整備されたことにより、「言語」の障害としての失語症研究が大きく進歩した。例えば、グロジンスキーはチョムスキーのフレームワークを使い、「痕跡削除仮説」と呼ばれる仮説を提出している (Grodzinsky, 1986)。チョムスキーの理論によると、ある種の構文は、単語がもともとあった別の位置から移動してできていると考えられている。

(1) a. 能動文基本語順

太郎が 花子を 追いかけた。

b. 能動文かき混ぜ語順

花子を_i 太郎が t_i 追いかけた。

(1a) は能動文基本語順で、単語の移動は含まれない。それに対して(1b) の能動文かき混ぜ語順では「花子を」が「太郎が」の後ろから文頭へと移動している。(1b) で、「太郎が」

の後ろにある ‘t’ は「花子を」がもともとあった位置を表しており、「痕跡」と呼ばれる。「花子を」と ‘t’ の右下についている ‘;’ の記号は、両者が同じものを指していることを示す記号である。グロジンスキーの痕跡削除仮説によると、失語症のあるグループではこの移動前の位置を示す痕跡（‘t’）がなくなっており、移動元の位置がわからなくなるために理解に障害がでるとされている。つまり上にあげた例で考えると、(1b) の文において痕跡である ‘t’ がなくなっているので、「花子を」がどこから移動してきたのかがわからず、正しく理解することができなくなってしまうということである。(1a) は移動を含まず痕跡を含まないので正しく理解できる。チョムスキーの理論では、移動という現象は言語に普遍的なものなので、グロジンスキーの痕跡削除仮説はどの言語においても適用できる仮説となる。このように個別言語間に普遍的な仮説をたてることで、さまざまな言語において仮説を検証することようになり、研究は大いに前進した。

3. グローバル化の問題点

3.1. グローバル化時代の問題点

グローバル化時代の問題として本稿で取り上げるのは、言語の消滅である。アジェージュによると、平均して毎年約二十五の言語が消滅している (アジェージュ, 2004: 3)。著者によれば、現在世界には約五千の言語があるが、現在の状態がこのまま続くなれば、今日現存する言語の半分が消滅することになる。グローバル化が進む中、少数言語は大国の言語に脅かされている。

言語の消滅の原因について、アジェージュは詳しく分析している (アジェージュ, 2004: 139-163)。ここでは経済的原因と政治的原因について簡単に触れる。まず経済的原因だが、アジェージュはアメリカ先住民の諸言語の衰退を例として説明している。マイノリティとなった先住民が新しい社会システムのなかで職業をみつけようとするならば、英語の知識が不可欠であった。そして、大部分の人間が言語習得の問題を経済的なコストと収入の観点から考えていたため、部族の親たちは英語と部族語のバイリンガル教育を行おうとは考えなかった。その結果部族語は急激に衰退していくことになった。政治的原因としては、国際語としての英語が政治の領域においてますます重要になってきていることが挙げられる。私的領域だけにとどめられた土着言語に対し、大規模なビジネスの担い手であり、従って政治的・文化的イデオロギーの担い手でもある国際語の与える圧力は大きい。少数言語と国際語との優位性の差は開いていくばかりである。

こうした原因に加えて、多数派言語話者の罪悪感のなさや少数言語話者の危機感の無さが言語の消滅に拍車を掛けているのではないかと、私は考える。多数派言語の話者は時に、むしろ善意によって少数民族をグローバル化の世界に引き込もうとする。例えば、少数部族の村にテレビを持ち込み、学校をつくり、英語を教える、といったことである。過度な介入には慎重になる必要がある。文化と言語は一度なくしてしまうと、再び取り戻すのは大変難しいからである。そしてこうした状況において、少数言語話者の危機感の弱さが言

語と文化の消滅を加速させてしまう場合もある。上に挙げたアメリカ原住民の例がこれに当てはまる。部族の言語が消滅してしまうことに関する危機感が無く、経済的に必要な英語のみでの教育を行ってしまう。

言語は文化と密接に関係している。土着の言語がなくなれば、土着の文化もなくなるだろう。グローバル化時代である現代では、世界は言語においても文化においても均質になる方向へ向かっている。すべてが均質になる世界は、シャルダンのいうオメガ点とは全く異なるものだ。シャルダンのオメガ点に関する考察から得られる、今後進むべき方向についての議論は第4章で行う。

3.2. 失語症研究における、言語間の普遍性を重視する理論の問題点

失語症研究においては、いまだ定説となるような仮説は提出されていない。これは、言語間の違いを重視せず普遍的な構造だけに原因を求める仮説には限界があることを示しているように思われる。言語学においては言語間の普遍的な特徴を調べることに主眼が置かれているが、言語間で特徴の違いは多くある。例えば、英語のような屈折語と日本語のような膠着語、中国語のような孤立語では言語の構造が大きく異なる。屈折語では主格、目的格などの文法格を表すために単語の一部を変化させるが、膠着語では単語にさまざまな格助詞を付けて格を表し、孤立語では語順によって文法関係を表す。また、日本語やロシア語のように語順が比較的自由に変えられる言語もあれば、中国語や英語のように語順があまり自由に変えられない言語もある。こうした言語間の違いがあるにも関わらず、どの言語においても同じ失語症の症状がでると考えるのは難しいだろう。

別の問題点としては、失語症の患者は、ブローカ失語やウェルニッケ失語などの失語症分類が同じ患者でも、実際には症状が均質ではないことが挙げられる。こうした患者を均質な群として仮定して研究を行うことは危険である。この点については長年議論されているが、いまだ良い解決策は提示されていない (Grodzinsky, 1990: 75-77)。一般化は科学において必要なものであるが、過度な一般化は避けなければならない。

4. 今後の方向性

4.1. ポストグローバル化時代

シャルダンによれば進化はオメガ点という一点に向かっている。グローバル化による世界の均質化は一見シャルダンの思想に合っているように思われるが、実は全く異なっている。シャルダンによれば「生命の樹の樹液全体を一本の枝だけのために集め、他の枝の死の犠牲の上に立つ民族主義者の理想は誤っているし、自然の理にそむいている。太陽にむかって伸びあがるためには、まさに木の枝全体の成長が必要」だという (シャルダン, 2011: 291)。これは私が第3章で述べた現代のグローバル化時代の問題に対する直接の批判になっている。本稿での文脈に置き換えるのであれば、言語や文化の均質化は間違った道であり、言語と文化が多様性を保ったまま、全体として成長していくことが必要ということになる。

再びシャルダンの言葉を引用すれば、「＜オメガ点＞は構造的に、その究極の原理において見る場合、多数の小さな中心群から成る一つの系の中央部で放射状に広がる別個の大きな中心にほかならない。全体的人格化と全体を構成する個々の分子的人格化が、最高度に独立した結合の焦点の作用によって、混じり合うことなく、しかも同時に、それぞれの極限に達するような集団」こそが進化が到達すべき点である（シャルダン, 2011: 315）。それぞれの言語や文化が、他の分子に侵されることなく、多様性を維持したままで成熟していくこと、これこそが目指すべき世界の形である。

シャルダンが批判した民族主義とは異なり、グローバル化時代における言語の消滅は作為的でないことも多い。第3章で述べたとおり、大国の経済的・文化的・政治的な優位性からくる二次的な影響として、言語が危機に瀕している場合が多い。このように、大国側にも少数言語側にも言語が消滅の危機に瀕しているという意識がない場合、この流れを止めるのは難しい。まずは少数言語や文化の価値、そして多様性を保守することの重要性を啓蒙することが急務である。こうした啓蒙活動に関しては、言語学や言語障害学の研究が貢献できることを第5章で示す。

4.2. 失語症研究の今後

シャルダンの思想は失語症研究においても進むべき道を示してくれる。上に示したように、彼の言うオメガ点に向かう進化とは、個々の多様性を維持したまま全体として成長することである。すなわち失語症研究に関して言い換えるならば、個別言語間の違いを軽視せず個々の違いに向き合いながら、全体の理論を発展させていくことと言えるだろう。

私の今後の研究に関して考えると、失語症研究における言語の多様性を増やすために、日本語の失語症の研究を積極的に世界に発表していくことが必要である。失語症研究全体をみると、やはり英語の研究が多く、日本語の失語症の研究はほとんど取り上げられない。日本語は英語とは大きく異なるからこそ、日本語の失語症研究はもっと知られるべきである。さらに、日本語とも英語とも大きく異なる言語として、日本手話がある。日本手話の失語症研究も積極的に発表していく必要がある。手話言語の失語症研究は大変少ない。とくに日本手話の失語症研究はほとんどないと言ってよい。音声言語とは大きくことなる手話言語の研究は失語症の研究全体に対して多様性を与え、研究のさらなる進展に貢献するだろう。

5. グローバル化時代の問題と学問的研究の接点

5.1. 責任

シャルダンは、自分のことだけを考える自己中心的な思想を批判している。彼は、進歩のために孤立が必要とする思想を否定し、むしろ人間は自分以外のあらゆるものとの関係の中で成長すると主張している（シャルダン, 2011: 281-283）。彼によれば、「自己本位にくめいめいが自分のことだけかまっていればいい」という極論に走ることを辞さない人人のた

めの未来という自己中心的な理想は間違っているし、自然の理にそむいている。いかなる分子も他のすべての分子とともに、また他のすべての分子によってのみ、動き、そして成長する」のである (シャルダン, 2011: 291)。

本章では、人類全体への責任を果たすため、私の研究領域においてグローバル化時代の問題解決に関して貢献できること考察する。事例として、日本でのろう者の言語権の獲得における言語学の果たした役割について概観し、失語症研究からの貢献を考える。

5.2. ろう者の言語権獲得と言語学

2003年5月、ろう学校に通う生徒とその親たちが日本弁護士連合会に対し、ろう者の言語権を根拠として、ろう学校において日本手話による授業を実施することなどを求めて人権救済申立をした。小嶋によれば、言語権とは、言語の習得及び自らが習得した言語の私的・公的なしよ選択の権利である。これを受け、日本弁護士連合会は「手話教育の充実を求める意見書」を公表し、国に対し、法的に手話を言語として認めることや、手話による教育を受けることを選択する自由を認めることなどを要請した (小嶋, 2012: 78-79)。

近年まで、日本ではろう者に対し口話教育を行い、日本手話の使用を認めていなかった。ろう者には口話法により日本語を獲得することは大変困難である。ろう者にとって自然に獲得できる言語は、手話言語である。子どもにとって第一言語の獲得は心の発達や知能の発達に極めて重要であるにも関わらず、当時のろう児は自然に第一言語として獲得される日本手話の使用を禁止され、獲得のできない日本語の口話教育を受けさせられていた。

この背景には、日本手話がジェスチャーのような非言語的コミュニケーションと捉えられ、日本語や英語のような自然言語とみなされていなかったことが大きい。言語権を主張するためには、日本手話が日本語と同様の自然言語であることが前提となる。そこで、言語学が日本手話を日本語と同じく自然言語であると示したことが重要な根拠となったのである。とくに日本手話が複雑で、しかも日本語とは異なる独自の文法構造を持つことが示されたことが、日本手話が自然言語であるという主張を強く根拠づけることになった。

現在では、口話法を強制するろう学校は少なく、日本手話が自然言語であるという認識も広まってきていると思われる。このように、言語学は日本手話という少数言語を守ることに大きく貢献することができた。

5.3. 言語多様性の保護と失語症研究

言語の多様性を守るために失語症研究が貢献できることは、多様性の価値を啓蒙することだと思われる。失語症研究において、多様な言語の失語症を研究することが、失語症の研究の進展にとって重要であるということを第4章で述べた。失語症の解明が進めば、より良いリハビリテーションの方法も明らかになってくるだろう。つまり植物の多様性が薬を作るのに不可欠なように、言語の多様性そのものが医療の進歩に貢献しているのである。言語の多様性について考えるきっかけとして、医療との関わりは興味をひく話題ではない

かと思う。まずは言語の多様性というテーマに目を向けさせることが大切である。

また、失語症は脳血管障害によって生じることが多い。したがって、生活習慣病の患者が増え、高齢化が進む先進諸国では、今後失語症患者数は増加していくと予想される。失語症は誰もがなりうる病気であることから、今後はさらに関心が高まってくるだろう。先進諸国で関心が高まることは、多様性の保護を訴えるには特に都合が良いことである。失語症研究を通すことで、言語的に優位にある先進諸国に対して、言語の多様性の重要さを訴えることができるかもしれない。

6. おわりに

グローバル化時代の問題と失語症研究について、シャルダンの思想をもとに考察してきた。シャルダンの進化の思想を踏まえることで、現在の問題点と今後の進むべき方向性が明らかになった。グローバル化が進み、多様性が消滅している現代において、シャルダンによるオメガ点への進化の思想は、私たちの未来に希望を見せてくれる。「地球は相対的な意味で収縮しつつある。そのためにわれわれは外側から圧縮する力を受けている。ところがこの力が過度になると、増大する斥力——それは個人個人の人間をしばしば対立させている——の不思議な壁をわれわれが乗り越える日がいつかはやってくるだろう」と、シャルダンは言う (シャルダン, 1969: 295)。人間を信じ、より良い世界を目指そうとするシャルダンの姿勢は、グローバル化時代を乗り越えるために、まさに模範とされるべきものである。

文献

- Grodzinsky, Yosef. (1986). Language deficits and the theory of syntax. *Brain and Language*, 27, 135-159.
- Chomsky, Noam. (1957). *Syntactic Structures*. Berlin: Mouton, The Hague.
- クロード・アジェージュ. (2004). 絶滅していく言語を救うために：ことばの死とその再生. (糟屋啓介, 訳) 白水社.
- テイヤール・ド・シャルダン. (1969). テイヤール・ド・シャルダン 著作集7 人間の未来. (伊藤晃, 渡辺義愛, 訳) みすず書房.
- テイヤール・ド・シャルダン. (2011). 現象としての人間 [新版]. (美田稔, 訳) みすず書房.
- 小嶋勇. (2012). 言語権をめぐる道のり. 著: 佐々木倫子, ろう者から見た「多文化共生」：もうひとつの言語マイノリティ (ページ: 78-92). ココ出版.